

# 雑誌『満洲浪漫』における 北村謙次郎の文学理念

韓 玲玲

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

満洲国の日本人作家を代表する北村謙次郎は、在満中、総合文芸雑誌『満洲浪漫』を創刊、主宰した。この雑誌において、彼は「満洲ロマン」という文学理念を提唱した。この理念は、北村が満洲で追い求めた文学の本質を示すものであり、彼の文学の全体像を解明する鍵となるものでもある。本稿では、雑誌『満洲浪漫』の編集内容を通して、この作家の「満洲ロマン」理念を検討する。

『満洲浪漫』は1938年に創刊された。当時の満洲国では、日本文学者の創作発表の場が足りないばかりか、一般の文芸作品が日本人の目に触れる機会も少なかった。北村は、そのような現状を打破したいと痛感し、雑誌を作ることを決意した。『満洲浪漫』は満日文化協会の財政的協力のもと、首都の新京において、北村謙次郎の努力によって誕生した。

『満洲浪漫』は全六輯からなり、ほとんど北村の編輯によるものである。寄稿者には、吉野治夫、緑川貢、横田文子、檀一雄、木崎龍、逸見猶吉、長谷川濬、大内隆雄などがいた。誌面は小説、詩、随筆、評論などを中心に構成され、その他、音楽、映画、演劇といったジャンルにも目配りがなされ、総合文芸雑誌としての多様性を窺わせるものとなった。特に第四輯の「満洲作家選集」と第五輯の「満洲文学研究」は、同誌を満洲国を代表する文芸雑誌として不動の地位につけた。

この雑誌を通して、北村は自分の文学理念を模索しつづけた。彼にとって文学とは、自己表現の手段であり、自分の人生体験の存在証明でもあった。彼は文学の純粹さを強調し、文学の功利性を根本的に否定している。その文学は苦心の結晶であり、生活に深く沈潜しないと出来るものではなかった。

その考えに基づいて、北村は「大陸日本人の生きかたの規範としてのロマン」を「満洲ロマン」（「大陸ロマン」）であると定義した。彼は日本文化の優越感などを一切捨てて、肌から満洲の風土を感じることを強調し、自分の「死」によって膚肉から満洲風土を吸収するというふうに主張した。そして、それによって、他民族と一体化することを望んでいた。

しかし、創刊から僅か3年のうちに、満洲国の文化状況は大きく変わった。『満洲浪漫』も、北村謙次郎の求めた「大陸ロマン」も、満洲国政府の「文化統制」によって息の根を止められた。それはつまり、北村謙次郎の満洲に託した夢の挫折でもあった。

キーワード：北村謙次郎、満洲国、植民地文学、満洲浪漫、満洲文学

はじめに

1. 『満洲浪漫』の創刊
2. 『満洲浪漫』の相貌

3. 『満洲浪漫』に見る北村謙次郎の文学理念  
終わりに

## はじめに

満洲国の日本人作家を代表する北村謙次郎は、在満中、綜合文芸雑誌『満洲浪漫』<sup>1)</sup>を創刊した。この雑誌において、彼は「満洲ロマン」<sup>2)</sup>という文学理念を提唱した。この理念は、北村が満洲で追い求めた文学の本質を示すものであり、彼の文学の全体像を解明する重要な鍵となるものでもある。本稿では、『満洲浪漫』の編輯内容を通して、北村謙次郎の「満洲ロマン」理念を分析する。また、この一連の分析を通して、当時の満洲国の文化状況及び在満日本文学者の表現活動の実態も明らかにする。

### 1. 『満洲浪漫』の創刊

『満洲浪漫』は1938年10月に創刊された。翌年度の『満洲年鑑』では、「南満においては平和的静観的で内地文化を導入した一種爛熟した形態への方向をとり、北満においては非常時的国策的で、新興満洲を中心とした発生的な文芸活動となつたのである」<sup>3)</sup>と記録されている。満洲における日本文化の浸透が不均等であることがうまく伝えられている。南満は大連や奉天を中心とする満洲の南部地域で、主に関東州のことを指している。北満は新京を中心とする満洲の北部を指していて、ハルビンなど黒龍江省の広い地域を含んでいる。南満では、大連をはじめとして、日露戦争前後から多くの日本人が移住しており、日本文化が浸透していた。1910年代の句誌『アカシア』、川柳誌『漣』、歌誌『かはせみ』、『夕陽』、1920年代の総合雑誌『新天地』、詩誌『亜』、そして戦後まで刊行し続けた同人雑誌『作文』など、南満の日本語雑誌の興隆は、大陸に進出した日本文化の豊かさを物語ってい

る。一方、北満の新京では、満洲国建国以降、日本人の往来が激しくなった。しかし、日本文化の浸透が関東州より25年近く遅かったため、日本語文学の発達も遅れていた。1930年代にはいると、ようやく名を挙げるべき雑誌が現れた。1932年9月、奥一によって創刊された『高粱』という文芸雑誌である。ここには、大内隆雄や青木実なども寄稿しているが、その他多くの執筆者は文学史に名を残すことなく消えてしまった<sup>4)</sup>。1935年10月、同誌は経営不振のため廃刊された。その後、『満洲浪漫』が創刊されるまで、新京では日本語の文芸雑誌はほとんど見当たらなかった。

当時の在満日本文化人にとって、文芸作品の発表の場は、『満洲日日新聞』、『大新京日報』、『新京日日新聞』などの新聞の「文芸欄」のほか、文芸作品の主な発表媒体は、小説数篇で飾られた時事評論の刊行物<sup>5)</sup>である。大連の文芸同人雑誌『作文』は大連在住の文学青年を中心とするもので、その読者層はほとんど大連在住者に限られていた。他方、新京には、中国語の文芸雑誌『明明』があった。『明明』は日本人城島舟礼の支援金によって、月刊満洲社から刊行された雑誌であるが、古丁など中国人作家の作品、もしくは日本人やロシア人の中国語訳が掲載される雑誌であり、日本語に対応した文芸雑誌ではない。

南満・大連の文芸雑誌『作文』に対して、北満・新京には、対応する雑誌がない。新京の中国語文芸雑誌『明明』に対しても、それに対応する日系雑誌は存在していない。新京における日系文芸雑誌の不在は、首都としての文化的劣勢が著しいため、その誕生は、満洲国政府のみならず、新京の日本文化人の間でも長らく期待されていた。

東京の文壇で活躍していた北村謙次郎は、新京に着いてすぐに満洲文芸界に日系雑誌が少ないことに気がついた。このことは、北村にとって大きな衝撃であった。彼は、優れた文学作品が、より多くの人に読まれるべきであり、自分が一文化人として何とかしなければならないと考えたのであった。その認識は徐々に深まり、満洲映画協会に勤めた1年後、北村はついに雑誌を作ることを決意した。

矢原礼三郎の案内で寛城子を見物に行った日<sup>6)</sup>のことである。北村謙次郎は、「この秋のうちに、ぜひ雑誌を出したいんだよ。それも、どこへ出してもヒケをとらないようなを出したいのだ」<sup>7)</sup>と、同じく満映に勤めていた矢原に打ち明けた。すると矢原は、「それはいい。市内へ引越しても大いに協力するよ」と声援を送った。矢原は旅順出身の詩人で、先輩に北川冬彦があり、東京の『麵麴』の同人でありながら、大連の詩誌『鵲』にも関わっていた人物である。その時の矢原は、すでに満洲映画協会に入社し、製作部に配属されていた。

ほぼ同じ頃、満洲国総務庁の弘報処に勤務していた木崎龍は長谷川濬、別役憲夫らと同人雑誌『白想(バイシャン)』の創刊を計画していた。しかし、それがうまく軌道に乗らないため、思い切って同人を集め、新しい計画に乗り換えようと考案しているところであった。それを聞きつけた北村謙次郎は、直ちに木崎に相談を持ちかけた。木崎は東京帝国大学国文学科の出身で、当時、弘報処で『宣撫月報』の編集をやっていた。彼は北村の計画を聞いて、直ちにそれを実行する方法を見つけた。それは、満日文化協会の杉村勇造を説得することであった。

杉村勇造は北村謙次郎より四歳年上で、1920年代に北京大学に留学したことがあり、中国の図書館を経て、満洲各地の図書館の開設に携わった人物である。1933年、満日文化協会が創立された時に、杉村は満日文化協会の常務主事に務めるようになった。同会は主に史料復刻や遺跡・

建築物の調査保存といった事業に従事していた。

木崎龍と杉村勇造の交渉は、大興ビルにあった満日文化協会の応接室で行われた。静かに流れ込む光の中で、木崎は椅子に胡坐をかいて意気揚々とその構想を語り、杉村は「ふむ、ふむ」と相槌に徹していた。そして、木崎が語り終えるやいなや、「いいでしょう。やってみてはどうです」とあっさり同意した。親切な杉村は、「三枝(朝四郎)君が文祥堂の佐藤好郎君と親しいから、印刷は文祥堂に頼めばいいでしょう」<sup>8)</sup>と雑誌の印刷所まで手配してくれた。

雑誌創刊の行政的な手続きに詳しくない北村謙次郎は、それらのこと一切を木崎に任せて、自らは編輯の事務に専念した。そのことから見ると、満洲国で北村謙次郎と木崎龍の出会いは、雑誌『満洲浪漫』の刊行において、決定的な意味を持つと言っても過言ではない。こうして、新京文芸界において、それまで欠如していた日本語雑誌を創刊するという北村の構想が、多くの在満文化人の期待と協力を荷なって実現することになった。

## 2. 『満洲浪漫』の相貌

『満洲浪漫』は、創刊から1940年に終刊するまで、全六輯が発行された。全六輯の装丁は画家の今井一郎のデザインで、表紙には「満洲浪漫」の四文字を明朝体で大きく印刷し、そのバックには緑と黄などの色が使われている。これは日本を出ていたモダニズム詩誌『詩と詩論』の清新な装丁を模したものであった<sup>9)</sup>。『満洲浪漫』の後、「満洲浪漫叢書」というシリーズが刊行された。このシリーズは、作品集『僻土残歌』(1941年)、北尾陽三著『明暗』(1942年)、大内隆雄著『或る時代』(同)、鈴木啓佐吉著『愛情の緩急』(未詳)、鳥羽亮吉著『流沙香綺譚』(1942年)の五点からなる。

第一輯は1938年10月27日に発行された。定価は1円20銭で、著作人は北村謙次郎、発行人は佐藤好郎、印刷人は高橋貞二であり、印刷所と発

行所は文祥堂であった。創刊号の同人は飯田秀世、今井一郎、木崎龍、北村謙次郎、坪井興、長谷川濬、松本光庸、矢原礼三郎、横田文子の九人である。同号は小説、詩、随筆、評論などを中心に、「満洲文化について」というアンケートを含め274頁にもなった。小説がその大半を占め、吉野治夫「姉妹のこと」、長谷川濬「伝説」、今村栄治「同行者」、田兵「アリヨーシヤ」(大内隆雄訳)、横田文子「白日の書」などが掲載されたが、書下ろしは少なく、その多くが再録作品であった。詩は坂井艶司「なめくちの歌」、長谷川四郎「長城論」、評論は木崎龍、牛島春子、藤川研一の作品が掲載された。誌面全体の内容は文学のみならず、音楽、映画、演劇といった多様なジャンルにも目配りを利かせ、文化・芸術一般にわたる総合雑誌として育つ可能性を窺わせるものとなった。とりわけ注目されるのが、「満洲文化について」と題する小特輯である。ここでは満洲文化の様々な分野が俎上にあげられ、雑誌に寄せる期待なども記録されている。

第二輯は1939年3月10日に発行された。定価は80銭である。長谷川濬が著作人となっている<sup>10)</sup>。発行人と印刷人は前輯と同じである。全176頁で、小説が相変わらず全体の半分を占めた。第一輯の多様性を引き継ぐと同時に、末尾に「同人語」というコラムが載った。新たな同人として逸見猶吉、大内隆雄、岡田壽之、荒牧芳郎の四人が加わり、この四人も全員「同人語」に小文を寄せた。小説では、竹内正一「白眠堂徑徂」と長谷川濬「家鴨に乗った王」をはじめ、長谷川四郎の「狂人日記」、青木藜吉の「浮雲」、工清定の「満洲の胎動」などの書き下ろし小説の他、民生部募集の日本満洲国承認記念当選文芸作品として「満系」作家用章の「魚骨寺の夜」と袁犀の「隣三人」(両篇とも大内隆雄訳)も収録された。詩は逸見猶吉と坂井艶司が発表し、その他、吉野治夫の随筆、木崎龍の評論などが掲載された。この輯の面白いところは、長谷川濬の「編輯後記」にある。「第一輯は旧作集なるが故に期

待に反したとの世評を受けた。だが満洲浪漫の誕生だけでも満洲文壇の異彩だつたと我々は自負してゐる、如何？」<sup>11)</sup>。その「如何？」は、北村の抑制的な語調と異なり<sup>12)</sup>、長谷川なりのロマン的な論調と自慢をあらわに出している。しかし、その「自負」は、長谷川濬だけではなく、北村と他の『満洲浪漫』同人すべての共通認識でもあったことだろう。

第三輯は1939年7月23日に発行された。著作人は北村謙次郎、出版社と印刷所は前輯と同じで、定価は1円である。同人には、緑川貢が新しく加入した。この第三輯は小説、詩、随筆、俳句、評論、「特輯 文化機関当事者に訊く」からなる。259頁の大冊で、創刊当初の「綜合文芸雑誌」の特徴を最も鮮明に出している。

小説は八篇。この内、「建国記念文芸当選作」の二篇が掲載されている。1937年の『満洲日日新聞』懸賞小説に入選した北尾陽三もこの号から登場している。また、白系ロシア人作家H.A.バイコフの「マーシユカ」(大谷定九郎訳)や古丁の「昼夜」(大内隆雄訳)も掲載された。一方、詩の欄ではこれまでの三篇から五篇に増え、逸見猶吉、坂井艶司、矢原礼三郎、長谷川四郎、藤原定などの作品が発表された。随筆の欄では、『作文』の町原幸二、『日本浪漫派』の緑川貢、満映監督の坪井興、脚本家の中村能行、画家の池辺青李などが稿を寄せた。特に目を引くのが、「文化機関当事者に訊く」という特輯が組まれたことである。「國務院弘報処」勤務の磯部秀見、「満洲事情案内所」所長の奥村義信、「満洲国立図書館」設置委員の山崎末次郎、「中央博物館」館長の藤山一雄、「新京放送局」副局長の金沢覚太郎など満洲国文化の指導者層からの寄稿が並ぶ。

巻末を飾るのは、評論作品である。三つの文章はすべて質量ともに読み応えがある。西村真一郎の「竹内正一論」は竹内の創作集『氷花』を取り上げ、竹内の文学思想を検討した。西村は、竹内の文学には、「政治性」が欠けているとしながらも、その作品は「満洲文学でなければ、満

洲を知り尽した者でなければ、表現し得ない」<sup>13)</sup>ものとして高く評価し、そこに流れるヒューマニズム性に注目した。松本光庸の「映画の作家精神」は満洲の映画現状を前にして、「新しきモラルの創造」にかかる映画作家精神を説き、「映画の新精神」を唱える。木崎龍の「島村抱月論」は6年前の旧稿を書き改めた小論。東京帝国大学での研究生生活を回想しながら、明治評論史を覚え書き風に辿って見せたものである。『満洲浪漫』の片隅を借りて、自身の研究成果を発表していきたいと、遠慮がちに語っている。「後書」は北村謙次郎による。北村は、この号の出来について「盛観を呈した」と述べ、同人に限らず多方面から原稿を募集したいという意欲を伝えた。

第四輯は1939年12月15日に発行された。定価80銭。前三冊と違って、表紙には黒く「満洲作家選集 満洲浪漫特輯」という題字が書かれているほか、奥付の表記も「満洲浪漫」ではなく、「満洲作家選集」となっている。全212頁、十篇の小説と二篇の評論によって構成されている。前三号の目次と違って、ジャンルを分けずに作品名と作者を並べるだけで、編集方針の変更が明白である。この編集に対して、北村の「後書」は以下のように述べている。

満洲作家の最初の作品集たらしむべく、案をたててからできるだけ広範囲の人たちに作品を依頼したけれども、第一輯の時とはまた事情が違ひ、書下ろし作品をとの注文だつたし、枚数もかなりな分量のものを求めたためか、思つた約半数の作品より集まらなかつた。しかしその代り本輯の執筆者諸氏は、満洲で粒よりの代表作家ばかりである。作品もそれに応じて、何れも各作家の個性を生かした佳作揃ひだと思ふ<sup>14)</sup>。

本輯には吉野治夫の「秋」を巻頭に、長谷川濬の「烏爾順河」、疑遅の「梨花落つ」(大内隆雄訳)、北尾陽三の「虚脱」、大瀧重直の「土の

種子」、石軍の「窓」(大内隆雄訳)、青木実の「北辺」など「粒よりの代表作家」の佳作が一堂に収録された。編集者としての北村謙次郎の達成感は大きかったに違いない。しかし、この雑誌が季刊誌として順調に刊行されたのは第四輯までで、その後、発行は遅滞を見せてくる。

第五輯は、「満洲文学研究」と題された特輯号である。1940年5月2日の発行。編集人は北村謙次郎で、定価は1円50銭。全175頁。前四冊の発行所は「文祥堂」であったが、この号では「東都書籍新京出張所」に変わった。ページ数を減らしたものの、その割には定価が高くなっているのは、雑誌刊行において財政が問題になってきたからなのだろうか。巻頭の「凡例」によると、

本輯第一部には満洲文学の一般的考察、本質的研究を、第二部にはその側面的研究を、第三部には作家作品論、第四部には特殊研究、第五部には綜合文化を求むる意味より、他の姉妹芸術に関する二論を収めた<sup>15)</sup>。

内容の分類から見れば、編集者が極めて苦心を重ねたことが推測される。評論特輯として、この号は強力な執筆陣を揃えた。王則、辛嘉、西村真一郎、三好弘光、吉野治夫、丘益太郎など、満系作家の文章がいくつか集まったのみならず、満洲の各分野の評論家に求めた文章は、満洲文壇の現状をよく反映しているといえよう。そのころ文壇では、「満洲文学とは何か」というテーマで、にぎやかな論争が続いていた。「満洲文学の独自性とは何か」、「建国ロマンとは何か」、「満人(中国人)をどう描くか」などといった問題をめぐって、さまざまな見解が提唱されていた<sup>16)</sup>。第五輯の特輯は、各分野の専門家の文章を並べ、満洲文学の特質を語ることによって、この論争に一つの方向性を与えようとする試みであった。

第一輯から第三輯は「綜合文芸雑誌」で、第四輯は「満洲作家作品集」、第五輯は満洲文学に関係ある全般的な評論集で、『満洲浪漫』の使命は

ここでひとまず、終着を見たようにも思われる。

第六輯は北村謙次郎のいう「満洲浪漫新発足」<sup>17)</sup>として、1940年11月15日に発刊された。この号をもって、この雑誌は実質的に休刊する。編輯者は北村謙次郎で、発行所は興亜文化出版社に変わった。発行者は石見栄吉、印刷者は鈴江一臣。定価は1円60銭。全250頁。内容は以前と違って、文芸作品だけで編まれ、しかも分量が少ない。六篇の作品のうち、小説は三篇、詩二篇、劇曲一篇である。この号で注目したいのは檀一雄の登場である。彼は1940年、満洲に到着して間もなく『満洲浪漫』との交流を深めた。北村の「跋にかへて」では、第一輯の「跋」で唱えられた「大ロマン」の主張に勢いが出てきた。

満洲浪漫創刊以来、僕らは満洲国建国の理想を趁ひ、その理念の定着について語ってきた。しかも文学の難しさは、どこまで僕らの説くところが作品の上にまで具現化され得たか、顧みて一応の疑念を持つ。しかも満洲に文学するもの、生きかたの一斑を示し得たことは、ひそかに僕らの信じ止まぬところである。浪漫精神を説いて天に飛翔する代りに、僕らは地に這つたのである。ただその間にも、浪漫精神の内包する烈々の気概は、時に平俗への挑戦となつてあらはれ、詩の擁護、似而非文化の排撃ともなつてあらはれた。事は知性の統率による秩序を招くと同時に、新しい怒りをも呼んでゐるのである。(中略) 出版のことに携はるのは、もとより僕の任ではない。ただ今日、新しい協力に俟つて、満洲浪漫の新体制版を贈るはこびとなつた所以は、真の文学道樹立への執着がさせた業にほかならぬ。由来、書物の題名とは、観念上の存在にほかならぬ。満洲浪漫の名は、そのやうなものとして人の脳裏に映ることを信じ、今後は新しい名による個人集、詩集、アンソロジーの類をも、広範囲に亘つて集積したい念願である。以上を、満洲浪漫新発足の辞とし、跋にかへる<sup>18)</sup>。

理想と実践の距離を認めながら、理想への努力を語り続けている。「跋」の後半を通しては、「満洲浪漫」という誌名は「観念上の存在にほかならぬ」と述べ、さらに新たな「観念」のもと、広範囲な文芸運動を展開したいとする「満洲浪漫新発足」の抱負を披瀝した。この号をもって編輯実務から身を引こうとする北村の姿勢が多少とも窺えるし、反面、「満洲浪漫新発足」への期待と共に、満洲文壇発展のため更に寄与していきたいとする自身の覚悟も垣間見えるようだ。

「満洲浪漫新発足」の実践は、1941年5月5日に刊行された単行本『僻土残歌』から始まった。編輯者は北村謙次郎、発行所は第六輯と同じ興亜文化出版社である。判型はB6。全192頁。定価1円20銭。表紙は奥行雄が描いた、春節に飾られる年画（ニエンファ）を題材にした図案であるが、雑誌『満洲浪漫』の表紙とは、明らかに異質のイメージをもたらし、そこに編輯方針の転換をうかがうことも出来る。タイトルは「春季作品集 僻土残歌」、下部に「満洲浪漫叢書」、その下に「興亜文化出版社版」と小さく記されている。内容的には、檀一雄の「僻土残歌」を巻頭に、鈴木啓佐吉「鉄路機廠」、長谷川濬「鷺」、檀一雄の「樹々に匍ふ魚」、苦土「皮鞋」（大内隆雄訳）、北尾陽三「私の平凡な生活の記録」など五篇の小説と、附録の「白系露人作家紹介」からなる。「跋」には同書の執筆者のほぼ全員が顔を揃えていて、そのあたりには、以前の『満洲浪漫』のスタイルをいくらか残している気配を覚える。

その後、この叢書は判型を文庫本サイズに変え、先に述べた四冊が刊行された。そのうちの二冊、大内隆雄著『或る時代』は、1942年9月25日に出版された。素朴な筆致で、作者自身の体験を基に書かれた小説で、満洲に住む知識人の生き方を理解する一助として貴重である。大陸を愛する一青年が、思想問題から職場を追われ、日本に帰ってくるが、やがてまた満洲に戻ろうとする。中国人との交流も絡ませ、時代の波に

翻弄される主人公の日々を描いたものであった。

以上が『満洲浪漫』と、それに続く「満洲浪漫叢書」の概要である。この雑誌は、編輯の都合で不定期刊行になりながらも、2年間にわたって持続し、満洲に住む文学者たちに安定的な創作発表の舞台を提供したのだった。

### 3. 『満洲浪漫』に見る北村謙次郎の文学理念

全六輯からなる『満洲浪漫』の編輯に力を尽くしながら、北村謙次郎は小説、評論及び編輯後記など、いくつもの文章を同誌に発表した。それらの内容を通し、北村の提唱した「満洲ロマン」の理念もある程度は理解できるだろう。

創刊号の「跋」の冒頭は、このように始まった。

われわれの仕事が、現在すぐ何かの役に立つだろうといふやうなことは、あまり考へたくない。文学の仕事といふものは、純粹であればあるだけ、ものゝ役に立つこと尠ないものである。<sup>19)</sup>

文中での「われわれ」とは、『満洲浪漫』の同人達のことを指している。「現在すぐ何かの役に立つだろうといふやうなことは、あまり考へたくない」とは、1938年という、満洲国政府と協力していかなければならない時代において、北村は雑誌同人を明らかに「御用文人」とは別のものとし、雑誌同人の創作自由を求める姿勢を示したものと解される。「文学の仕事といふものは、純粹であればあるだけ、ものゝ役に立つこと尠ないものである」という部分では、北村は文学の純粹さを強調することを通して、文学のための文学という芸術至上の認識を伝え、文学の功利性を根本的に否定している。これは北村の生涯を貫いた認識であり、彼の文学行動の基準でもあった。北村には政府の宣伝に応じて書いた作品がないわけではない<sup>20)</sup>が、満洲で文筆活動に従事した同時代の日本人作家と比べ、それは極めて少なかった。彼の文学に対する執着

は、終始、日常的に執筆活動に専念していたことから窺えるだろう。時代に抗して筆を折った作家たちのような厳しい視点からすれば、北村の創作は、明らかに中国東北への侵略に加担し、戦争に協力したようにも見えるだろうが、本人にとっては、どのような時代にあっても、ただ書き続けたというだけのことであったに違いない。北村は、文学の非功利性を強調した後、『満洲浪漫』について、このようにも述べている。

われわれの実体は、もつと茫漠として捕捉しがたい。絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしき情緒は、惟ふにわれら各々人の内部において更に豊かであろう。われらはいま、いかに生きることにより、内部の豊かさのいや増すかを考へ、そして豊かさの自らなる氾濫の日の来るべきを信ずることに、最も大いなる喜びを知りたいと念願する<sup>21)</sup>。

ここでの「われわれ」は、雑誌『満洲浪漫』のことを指している。北村謙次郎は、『満洲浪漫』の「実体」は「絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしい情緒」といったものであると同時に、「茫漠として捕捉しがたい」存在だと解釈した。つまり、北村は『満洲浪漫』を創刊するに当たって、新人育成や日本文化の向上などといったことを目的としたのではなかった。この雑誌をもって、自己表現と自分の人生の記録の証明にしようとしていたのだ。

満洲国ができて6年目に、その首都新京で創刊された文芸雑誌において、政治的な目的ではなく、ひたすら個人の内部の豊さを求めたということは、北村謙次郎の時流に流されない気概であるともいえるし、文学に対する純粹な追求精神であったともいえよう。

引き続き第二輯の「同人語」において、北村は初めて「大きなロマン」という言葉を使い、第一輯の「実体」に代わる、文学に対する態度を表明した。

満洲浪漫は、決して厳正な写実文学を却けるものでないことははっきり認めて貰へると思ふが、鎖末な日茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかたの薄汚なさを却けることだけは、依然として変わらないはずであることも、はっきり認めておいて貰はねばならぬ。安易な行きかたを、絶対に却けたいのである<sup>22)</sup>。

この部分において、北村謙次郎は、「鎖末な日(常)茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかた」を「安易な行きかた」だと解釈し、「絶対却けたい」と主張した。その例証として、北村は横田文子の「白日の書」を取り上げた。「白日の書」は横田文子が満洲に渡る前に発表した小説である。レズビアニズムをテーマとしたこの作品は、1936年に芥川賞候補に選ばれ、日本内地では評価が高かった。そのため、横田が渡満した早々、北村はこの小説の『満洲浪漫』創刊号への転載を依頼した<sup>23)</sup>。しかし、第一輯で「白日の書」を読んだ北村は、第二輯では、「彼女は豊かな構成力を恵まれてゐるにも拘らず、この一篇ではひたすら自己を追ふことにのみ急で、豊かな構成といふものには逃げを打ち、大きなロマン文学を生み出すことに失敗した」<sup>24)</sup>と厳しく批判した。この小説は、工夫による創作というより、むしろ無意識な自己表現に留まったと見るべきかも知れない。北村からすれば「安易な行き方」に見えたのだろう。戦後、横田文子は「白日の書」を再刊できないかと北村に相談したことがあるが、彼はやんわりと断っている<sup>25)</sup>。北村にとっては、文学作品は作者の苦心の結晶であるし、たやすく作れるものではない。「安易な行き方」は、文学に対する冒瀆である。この認識は、北村謙次郎の生涯を貫いていた。戦時下の満洲では、文化環境が整っておらず、専門の作家さえいなかった。このような時代において、北村が満映の仕事を辞め、専門作家になったのも、この認識に基づくものであったのだろう。

『満洲浪漫』第五輯の「探求と観照」には、北村謙次郎の「満洲ロマン」の理念が最も系統的に提唱されている。この文章において、北村はまず、作家としての生き方は永遠の「価値の探求」と創作の世界に浸る「観照」とから成り立っていると規定し、文学者が「それぞれの生活の中に身を横たへ、更により広く、深い生活への渴望を捨てないものである」と述べ、文学者が生活から脱出すべきでないことを主張する。彼は、文学者に個性のないことを作品の類型化に起因するものと考えた。また、その根本の原因は時代の美意識の低下だと解釈している。しかし、「時代の美意識の低下」に至る理由については究明していない。また、文学と政治をめぐる論議に関しては、北村は両者を対立するものとせず、「中心に在るものは僕らの芸術家としての魂であり、美意識の純化といふ渴仰のみである。誰が国策の尊貴を知り、建国イデオの深さを知るものぞと聞へば芸術家以外にその人なしと答へたいのが僕の心情である」<sup>26)</sup>と書き、文学が政治から離反することはないという認識を示した。

これは一見、北村謙次郎が創刊号において示した、政治から距離をおきたいという姿勢と矛盾するようだが、それはおそらく、満洲国の文化状況に対応しての北村の変化だと言えらるう。すなわち、1938年当時、日本語の文芸雑誌は満洲国政府にとっても必要であったし、北村にしても当面の必要から政府筋の支援に頼らざるをえなかった。その点で、注目しておきたいのは、『満洲浪漫』の創刊号から第三輯まで、少なからぬ政府系文化人が原稿を寄せていたことである。北村は政治に巻き込まれたいと宣言していたが、結局、時代の要請から脱出することはできなかった。第五輯が刊行された1940年5月から翌年にかけてあたりになると、日本語の文芸出版物はすでに珍しいものではなくなっていた。『モダン満洲』、『観光東亜』、『月刊満洲』などといった商業雑誌が文芸欄を充実させてきたし、『文学地帯』(新京)、『断層』(撫順)、『二〇三

高地』(大連)など、有力な文芸同人雑誌も満洲の各地に育ってきていた。と同時に、満洲国政府の文芸活動に対する姿勢も、より厳しくなってくる。文学者を会員の主体とする「満洲文話会」(在満文化人の親睦団体)に、まず協和会が干渉してきた。次いで、政府の弘報処が文話会を再編成し、新たな文化統制機構を作ろうともくらんだ(その結果として1941年3月、弘報処は「芸文指導要綱」を発表)。そうした状況の中、北村謙次郎が文学活動を継続していきたいのだったら、満洲国政府への協力の姿勢をさらに明白に出していかなければならなかった。そのような変化の中に、北村固有の文学創作に対する情熱と、満洲国に対する屈折した思いとをうかがうことができるわけである。

満洲国に渡ってから3年目、北村謙次郎は熱心に日本人の文芸・文化運動を推し進めながら、満洲文話会を通して中国文化人との新たな交流を求め、さらには満洲に住む白系ロシア人への関心も深めていった<sup>27)</sup>。その結果、北村は「満洲ロマン」という文学理念を主張するに到ったのだった。彼は、自らの「死」によって大陸日本人として生まれ変わろうとし、文学を通して多民族との交流を深め、彼なりの「民族協和」を目指したのだった。それが、彼の満洲国に対する認識であり、彼が満洲で追い求めた文学の役割であった。だが、傀儡の「国家」の上に建てられた理想は、本当に実現できるのか。

北村謙次郎にとっての「満洲ロマン」は、「古代日本人の明朗と潤達は、大陸の風貌の前に一旦は死ななければならないのである」<sup>28)</sup>というところから出発し、偏見なしに「大陸風貌」を認識すべきだという立場に立とうとするものであった。北村は、「知識としての大陸を語るのではない。膚肉としての大陸を語りたのである」<sup>29)</sup>と述べ、そのように大陸を理解すべきであると主張している。そのためにこそ、「じつとしてゐるよりほかない」態度と冷静な観察とが必要なのであった。このような考えは、北村の満洲滞

在期に育まれた重要な認識であるし、もともと彼の文学作品のほとんどに通底するものであった。1941年に『満洲日日新聞』に連載された長篇小説「春聯」の主人公・銀作はその典型的な一例であろう。身辺に建国運動に挺身する人たちがどんどん現れているのに、銀作は一人、日々相変わらず寛城子の住まいに「じつとして」いながら、周りの異民族を観察しているだけなのだ。

このような認識は、北村謙次郎の満洲の中国人文学者に対する態度から、より鮮明に見える。北村は、この土地で生活する中国人文学者の大陸性に共感を求めようとしている。彼は、中国人作家の作品に共通する「暗さ」に対して、「さきごろ僕は満人作家の小説集を読み、一概に暗いといつて批評した。明るい民族の声として当然である。しかし僕は、僕らが一旦死ななければならぬことを云つた。かうして満人作家の作品の暗さは、そのまま僕らにまでのしかかつて来るのである。われわれはその暗さを容認しなければならない。ではその暗さとは、永久の暗さであるかといへば、そこに僕ら作家として、大陸性への接近、溶解の度が現はれるだらうと考へるのだ」<sup>30)</sup>と書いている。中国人作家の「暗さ」に対する一般的な批判に比べ、北村はより寛容な態度を取っている。彼は、中国人作品の「暗さ」を認めつつ、自ら「一旦死ななければならぬ」ことで理解できると主張した。しかし、北村が説く日本人としての「死」には、どれほどの意味があったのであろうか。中国人作家たちのその亡国の苦しみや、侵略者と付き合わなければならない複雑な心情を、はたして北村は、日本人としての「死」と満洲人としての再生とを通して、どれほど理解できたのであろうか。文学を通して他民族との連帯を求めるといことは、北村が自己の文学理念を満洲国の「民族協和」という建国理念と一致させようとしたことを意味した。

つまり、北村謙次郎にとっての文学とは、国境がなく、支配者も被支配者も共有できるもの

であり、それを通して、両者を融和したいと彼は信じようとしたのだ。この認識は、北村の文学への情熱に由来するものであったのだろう。彼の文学者としての志は、「大陸ロマン」を定義し、実践することであり、「在満日本人の大陸でのいき方」とは、文学によって一切を解決したいという執念である。

一方、具体的な文学作品に対して、北村は相当厳しく、「鎖末な日（常）茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかたの薄汚なさを却けることだけは、依然として変はらないはずであることも、はつきり認めておいて貫はねばならぬ。安易な行きかたを、絶対に却けたいのである」<sup>31)</sup>と正統な文学観を強調している。そこから引き出されるのは、北村が自ら大陸の風土を獲得して、大陸での生き方を探り、正統な文学によって、日本人の満洲での定住を正当化するということに他ならなかった。

## 終わりに

以上に見たように、北村謙次郎は、自然主義文学や写実主義文学に反発して、ロマンチズムの文学を求める傾向を示していた。それをもとにして、北村は、「大陸日本人の生きかたの規範としてのロマン」<sup>32)</sup>を「満洲ロマン」（「大陸ロマン」）であると定義した。彼は、日本人の「満洲風土」への吸収を通して、他民族と一体化することを強く望んでいた。それは言い換えるならば、満洲国との一体化でもあったし、彼の文学の可能性という夢でもあった。

弘報処による文化統制が強化される以前、満洲文芸界は、まだいくらか「自由」な雰囲気の名残をとどめていた。それは僅かな期間ではあったが、北村謙次郎をはじめとする満洲の日本文化人と少数の中国人作家は互いに力を合わせ、満洲文芸界にひときわ輝く文芸雑誌を送り出した。しかし、その後の「文化統制」のもと、北村が情熱をもって育てた『満洲浪漫』もついに息の根を止められる。それはつまり、この雑誌

を通して語られた彼の夢の挫折でもあった。

## 注

- 1) 『満洲浪漫』は2002年7月10日、ゆまに書房より復刻されている。その別巻(2003年1月24日)には、呂元明、鈴木貞美、劉建輝、三名の監修者による論考が収録されている。また、『植民地文化研究』創刊号(2002年6月15日、植民地文化研究会)には、西原和海、岡田秀樹、西田勝の座談会「『満洲浪漫』をどう評価するか」が掲載されている。これらの先行研究において共通している問題意識は、『日本浪漫派』(北村も同人だった)と『満洲浪漫』との関連についてである。この両誌が、どのように連続し、あるいは断絶しているかといったテーマになるわけだが、本稿ではそこまで踏み込むことが出来なかった。筆者の非力を遺憾とし、他日を期することにしたい。
- 2) この文学理念は、『満洲浪漫』第五輯(1940年5月2日、東都書籍新京出張所)において提出された。同論では、「大ロマン」、「壮大なロマン」、「大陸ロマン」なども同じ意味で使われている。
- 3) 『満洲年鑑 昭和十四年版』、1938年11月25日、満洲日日新聞社支店、370-371頁。
- 4) 大内隆雄『満洲文学二十年』、1944年10月5日、国民画報社、193-120頁。
- 5) たとえば、『新天地』、『満蒙評論』、『満蒙』、『満洲行政』などといった文芸欄のある総合雑誌。
- 6) これについては、北村謙次郎の作品の中で二カ所に触れたことがある。一つは、『北辺慕情記』(1960年9月1日、大学書房)で、矢原との相談が、新京市内の居酒屋で行われたと書かれている。もう一つは、長編小説「浪漫の頃」(1960-70年代に書かれ、2013年4月から『索通信』に連載中)で、矢原との相談は寛城子で行われたと記録されている。この二カ所は一致していないので、ここでは後者の記述に依拠した。
- 7) 北村謙次郎、『北辺慕情記』64頁。
- 8) 北村謙次郎、『北辺慕情記』66頁。
- 9) 北村謙次郎、『北辺慕情記』68頁。復刻版『満洲浪漫』別巻に収録の鈴木貞美論文「『満洲浪漫』の評論・随筆」においては、『満洲浪漫』と『詩と詩論』の間には、表紙デザインのみならず、内容的にも共通要素があるのではないかと指摘されている。北村謙次郎の創作活動がモダニズム文学から出発していることから考慮しても、この問題はさらに追求されてしかるべきであろう。
- 10) このころ北村謙次郎は結婚のため東京に行っ

- ていた。そのため彼に代わって長谷川濬が「編集人」になったと思われる。
- 11) 長谷川濬、『満洲浪漫』第二輯、1939年3月10日、満洲文祥堂、176頁。
  - 12) 北村は「同人語」（第二輯）において、「ロマン文学」を生み出すために「無理な背伸びをしたくない」と述べている。
  - 13) 西村真一郎、「竹内正一論」、『満洲浪漫』第三輯、1939年7月23日、満洲文祥堂、第226頁。
  - 14) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第四輯、1939年12月15日、満洲文祥堂、212頁。
  - 15) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第五輯、「凡例」による。
  - 16) いわゆる「満洲文学論争」が活況を呈するのは、1938年に入ってからである。そのなかの代表的論文は、『満洲文芸年鑑 昭和十三年版』（1938年12月15日、満蒙評論社）、『同 十四年版』（1939年11月10日、満洲文話会）の二冊に集成されている。
  - 17) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第六輯、1941年11月15日、興亜文化出版社、250頁。
  - 18) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第六輯、250頁。
  - 19) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第一輯、1938年10月27日、満洲文祥堂、274頁。
  - 20) 例えば、北村の代表作「春聯」についても、そのことが言えよう。この長篇には、「満洲建国十周年」を慶祝するというモチーフもこめられていた。詳しくは拙論「満洲国における北村謙次郎の創作」（『日本研究』第四十八集、2013年9月、国際日本文化研究センター）を参照されたい。
  - 21) 北村謙次郎、『満洲浪漫』第一輯、274頁。
  - 22) 北村謙次郎、「時評的「詩と真実」」、『満洲浪漫』第二輯、169頁。
  - 23) 北村謙次郎、「浪漫の頃」、『索通信』第十五号、2013年5月10日、第18頁。
  - 24) 同15。
  - 25) 『索通信』第十五号（2013年5月10日）掲載の坂井信夫「あとがき」参照。同誌発行人の坂井氏は横田文子の令息。
  - 26) 北村謙次郎、「探求と観照」、『満洲浪漫』第五輯、65頁。
  - 27) 北村の居住する寛城子（新京の北部）には白系ロシア人が多く住んでいた。彼らとの日常的な接触を通して、北村は満洲国における民族問題を自身の文学に取り込んでいた。詳細は注20に挙げた拙論を参照。
  - 28) 北村謙次郎、「探求と観照」、『満洲浪漫』第五輯、73頁。
  - 29) 同21。
  - 30) 同21。
  - 31) 同17。
  - 32) 北村謙次郎、「探求と観照」、『満洲浪漫』第五輯、第72頁。

# *Manshū Rōman* and Kitamura Kenjirō

HAN Ling Ling

The Graduate University for Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Studies

Kitamura Kenjirō was one of the representative writers in Manchukuo. He founded the literary journal *Manshū Rōman* and advocated a concept of literature he called “Manshū romance.” The concept points to the essence of the literature pursued by Kitamura and is an important key to understanding his writing. This study takes up the contents of *Manshū Rōman* to examine the concept of the “Manchurian romance.”

*Manshū Rōman* was started in 1938. At that time there were few opportunities for continental Japanese writers to publish their works, nor was there a literary journal that published on behalf of Manchukuo. Kitamura Kenjirō recognized this condition and decided to create a magazine. Thus, *Manshū Rōman* was born. *Manshū Rōman* consists of six issues, five of which were edited by Kitamura Kenjirō himself. Most of the Japanese writers who were living in Manchukuo published their works in the magazine. Included among them are Yoshino Haruo, Midorikawa Mitsugu, Yokota Fumiko, Dan Kazuo, Kizaki Ryū, Henmi Yukichi, Hasegawa Shun, and Ōuchi Takao. The magazine primarily published short stories, novels, poetry, essays, and criticism, but also included writing about music, film, and theater to show its cultural comprehensiveness.

For Kitamura Kenjirō, literature was self-expression and the evidentiary record of his life. He carried out his concept of literature in this magazine. He emphasized literary purity and denied literary utility fundamentally.

On this basis, Kitamura Kenjirō proposed “the romance as a norm of a continental Japanese’s way of life,” calling it “Manchurian romance” (“continental romance”). He cast aside the sense of superiority of Japanese culture, and emphasized experiencing the climate of Manchuria through one’s own skin, so that when one died one would be assimilated into that climate. In this way, he tried to promote the unification of Manchukuo with the other races.

However, the magazine did not last more than three years, as change came about in the cultural situation of Manchukuo. The “great romance” which Kitamura Kenjirō asked for was ended by “cultural control” and his dream of the “Manchurian romance” was likewise frustrated.

**Key words:** Kitamura Kenjirō, Manchukuo, colonial literature, *Manshū Rōman*, Manchurian literature